



## よくある質問にお答えします

医薬情報研究所 株式会社エス・アイ・シー 取締役  
堀 美智子 先生

**Q** もう数ヵ月、ステロイド外用薬を投与しているアトピー性皮膚炎の患者さん。「まだ塗らなくちゃダメ?」と聞かれます。「医師の指示どおり、きちんと塗ってくださいね」と答えています。外見的には大分よくなっているようで、本当に大丈夫? 本当に必要?と思うこともあるのですが…。

**A** 以前に比べると、ステロイド外用薬に対する誤解や偏見は減っているように思いますが、漠然とした不安を抱えている患者さんは、まだまだ少なくありません。使用が長期に及ぶ場合はなおさらです。薬剤師の中にも、使い続けていて大丈夫なのだろうかという思いがあり、「なるべく薄く塗ってくださいね」「よくなったら、すぐやめてください」といったアドバイスをしているケースもあるのではないのでしょうか。

日本皮膚科学会「アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2008」には、次のような記載があります。

・ステロイド外用薬の外用量:第2指の先端から第1関節部までチューブから押し出した量(約0.5g)が、成人の手で2枚分すなわち成人の体表面積のおよそ2%に対する適量である(finger tip unit)。

ベリーストロングクラスのステロイド外用薬の長期使用試験結果より、皮疹の面積にも左右されるが通常の成人患者では分量である1日5gないし10g程度の初期外用量で開始し、症状に合わせて漸減する使用法であれば、3ヵ月間までの使用では一過性で可逆性の副腎機能抑制は生じうるものの、不可逆性の全身的副作用は生じない。3ヵ月以上にわたって1日5gないし10g程度のステロイド外用薬を連日継続して使用することは極めて例外的であるが、そのような例では定期的に全身的影響に対する検査を行う必要があり、ステロイド外用薬の減量を可能ならしめるよう個々の患者に応じて適切な対応が検討されるべ

きである。

・コンプライアンス:ステロイド外用薬に対する誤解(ステロイド内服薬の副作用との混同、およびアトピー性皮膚炎そのものの悪化とステロイド外用薬の副作用との混同が多い)から、ステロイド外用薬への恐怖感、忌避が生じ、コンプライアンスの低下がしばしばみられる。その誤解を解くためには十分な診察時間をかけて説明し指導することが必要であり、それが治療効果を左右する。

「アトピー性皮膚炎がなかなか治らない」という患者さんで、その原因がステロイド外用薬の使用量の少なさにあるケースも多いそうです。「finger tip unit」がどれくらいの量なのか、実際に手にとって感覚をつかんでおきましょう(意外に多くて、びっくりされるかもしれませんが…)。

また、表面的には赤みがとれてよくなったように見えていても、実際に皮膚に触れてみると、はれぼったい・厚ぼったい感じがすることがあります。これは、まだ炎症が残っている状態です。触ってみて、やわらかい皮膚になるまで、ステロイド外用薬の使用を継続するのが一般的ですから、患者さん自身に触れてもらい、その印象を確認することも大切です。

「副作用を防ぐ」という薬剤師としての視点はもちろん不可欠ですが、「薬剤をきちんと使って、よくなっていただく」ことが大切です。副作用の発現には十分な注意を払いながら、必要な量をきちんと使い、症状の改善や治癒を妨げない指導が望まれます。

もし、患者さんが不安を感じているようであれば、医師からどのような説明を受けているか、薬剤の使用量や使用歴、これまでの経過はどうかなどを確認したうえで対応が必要です。特に副作用などの心配がないと思われる場合は、「大分よくなってきたようですね。もう少しですね」といった励ましの言葉をかけることもよいかもしれません。

「治療を左右する」ともいわれるステロイド外用薬の説明・指導について、ガイドラインなども参考にしながら、もう一度、確認しておきましょう。